View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

33. 日本人労働者における自己効力感とメンタル疾患の受療リスク

医学部4年
朝倉真希
獨協医科大学公衆衛生学
西連地利己，武藤孝司

【緒言】うつ病の発症の危険因子を明らかにすることは，一次予防に役立つと思われる．ここで，セルフ・エフィカシー（self-efficacy, SE：自己効力感）という概念がある．これは，個人がある行動を起こす前に「～ができる」と感じることができるか，というものである．先行研究によれば抑うつ気分との間に密接な関係があり，SE の低い人は抑うつ傾向が強いとされている．先行研究では横断研究はいくつかなされているものの，コホート研究はほとんどされておらず，発症との関連は明らかではない．そこで，本研究では SE がメンタル関連疾患の発症リスクに関連するかどうかを明らかにするため，前向きコホート研究を実施した．

【方法】日本人労働者 1808 名（20 歳～70 歳）に対して 2005 年にアンケートにより SE を測定し，この集団を 2007 年 8 月まで追跡調査した．追跡調査にはレセプト情報を利用し，メンタル関連疾患の定義は傷病コード 504（気分障害）及び 505（神経症性障害，ストレス関連傷害及び身体表現性障害）と定義し，発症日は最初の受診日とした．SE とメンタル関連疾患の発症との関連は Cox 回帰分析を用いて検定した．統計解析にはソフトウェア Dr.SPSS Ⅱを用いた．

【結果】1.8 年間の追跡調査の間に 1808 名のうち 89 名がメンタル関連疾患により医療機関を受診した．SE の得点で低い方から Q1, Q2, Q3, Q4 に分けて検定すると，Q1 では受診率 7.0%，対して Q4 では受診率 3.1%，ハザード比 0.42（95%信頼区間 0.23～0.79）となり，SE の高い群では受診率が有意に低かった．SE の得点に加えて，性別や子供の有無，管理職にあるかなどもモデルに入れて検討しても，同様の結果であった．

【結論】本研究によって SE とうつ病発症との関連が明らかになった．日本人労働者において，高い SE はメンタル関連疾患の発症に対して抑制的な因子である可能性がある．

34. 獨協医科大学病院における周術期口腔ケア —消化器手術患者に対して—

口腔外科学
博多研文，土肥　豊，越路千佳子，泉さや香
和久井崇大，川又　均，今井　裕

当科では，平成 19 年 10 月より口腔ケア外来を開設し，各科より紹介頂いた患者の口腔ケアを積極的に行っている．今回われわれは，消化器手術患者における周術期口腔ケアについて検討したので報告した．

対象は，平成 19 年 10 月から平成 23 年 7 月までに，口腔ケア外来を受診した消化器手術患者である．検討項目は 1）疾患の内訳 2）口腔ケア外来への依頼の時期 3）口腔ケアを実施群 279 名（ケア群）と口腔ケア未実施群 100 名（非ケア群）の臨床検査値の比較である．

疾患の内訳は，大腸癌 162 例，食道癌 30 例，胃癌 17 例，膵臓癌 10 例，肝臓癌 30 例，肛門癌 2 例，良性疾患 28 例であった．依頼日から手術日までの期間は，手術当日 10 例，1～3 日 57 例，4～7 日 92 例，8～14 日 57 例，15～21 日 30 例，22 日以上 21 例であった．ケア群と非ケア群で WBC，CRP，体温，術後合併症について比較検討した結果，ケア群では，非ケア群と比較して WBC は 5 日目で有意に低値であり，CRP は 1 日目と 7 日目で有意に低値であった．さらに体温においては，ケア群は非ケア群に比較して，1 日目，3 日目に発熱は有意に低かった．術後合併症の発生率に関しては，ケア群，非ケア群の間に有意な差は認めなかった．食道癌症例についてのみ比較するとケア群では，CRP は 1 日目，3 日目そして 5 日目で有意に低値であった．さらに体温においては，ケア群は非ケア群に比較して，1 日目において発熱は有意に低かった．また術後合併症については，ケア群では 17.8%，非ケア群では 40.0%とケア群において発生率は有意に低かった．

今回の検討において，口腔ケア介入時期についてみると，口腔ケアに対する概念に医科・歯科間で相違があると考えられ，改善の余地があるものと考えられた．また，口腔ケアは，消化器手術周術期における炎症パラメーターの改善に寄与する事が示唆された．